人々の生活に目を向けて

日本国際ボランティアセンター（JVC）でスーダンの難民帰還支援活動に従事する佐伯美苗氏は、今までコソボ、アフガニスタンなど、様々な紛争の現場を経験してきた。しかし“平和構築”を強く意識してきたわけではない。佐伯氏の現在にいたる道筋とは。

（特活）
日本国際ボランティアセンター
スーダン事業担当・イラク副担当　佐伯 美苗 氏

イスラム圏への関心

佐伯氏は大学で社会人類学を専攻、イスラム圏の研究に取り組み大学院まで進学した。学生時代、パレスチナ紛争や湾岸戦争の報道に接する中でその偏りに気付き、いずれ修正したいと考えていた。では国際協力を志していたかというとそうではない。国際協力に取り組む友人の影響で何となく興味はあったものの、むしろアルバイトを通じて、ホスピタリティービジネスに強い関心を持っていた。大学院修了後は希望通り、ホテル経営会社に就職した。

しかし、学生時代に接した国際協力の世界は心の中に残り続け、働きながらNGOの活動にボランティアで参加。次第に、同じ会社でずっと勤めるよりも一度は違う仕事をしてみてもいいのではと考えるようになった。そして国際協力への転職を決意。2000年夏に、災害や紛争発生地域で医療・保健衛生分野の緊急人道支援活動を展開するNGO「AMDA」に仕事の場を移した。

スーダンのJVC整備工場内で自動車整備士から実習を受ける研修生＝JVC提供

紛争地域を駆ける

そこで初めて関わったのがコソボ紛争後の地域保健医療システム復興支援。上司について業務をこなすだけで精一杯という状態。そんな中、アルバニア人の町の一角にセルビア人が取り残され、その建物をコソボ治安維持部隊が守るという状況に直面し、地域社会に残された憎悪に否応なしに向き合うことになった。信仰や民族の名を借りた暴力を目の当たりにした最初の経験だった。

次の現場は、9・11事件が起こって間もない02年春のアフガニスタン南部復興支援。カンダハルにある国立病院の建て直しと、地域の重症者搬送システムの構築など、医療システムの復興に取り組んだ。事業が完了した03年、治安の急激な悪化に伴いアフガニスタンからは撤退したが、平行してパキスタンでの難民支援やイランやアルジェリアでの事業に携わった。これらの国に関わったのは全くの偶然ではない。「学生時代にイスラム圏の研究をしていたことが大きいです。言葉が分かり土地勘がある程度あったので、地域に入るきっかけには困りませんでした」と佐伯氏は話す。

スーダンで事業展開

07年10月にJVCに移り、現在取り組んでいるのが、南部スーダンでの「車両整備による難民帰還支援・技術者養成による生活再建支援」だ。スーダンでは連邦政府と南部スーダン人民解放軍の間で20年にわたる内戦があり、05年1月に和平協定が締結。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は09年6月まで大量の難民や国内避難民の帰還に取り組んでいた。JVCは車輌整備による難民帰還の後方支援を行うとともに、帰還した手に職を持たない若者に自動車整備士としての知識と技術を身に付ける技術講習を行い、地域の復興に貢献できる人材を育て、生計を立てる手段を得るための支援を行っている。

「平和に向けた対話も大事ですが、まずは人々が食べていけて、安定した生活が出来るようになること、自尊を持つことが重要」と佐伯氏。祖国に帰っても生活が行き詰れば再び近隣諸国に難民が流出し、地域の不安定要因になりかねない。この事業は09年末に終了予定だが、次は南北スーダンの暫定境界線上において、地域社会の平和構築に主眼をおいた事業を検討中だ。

平和構築というと、とてつもない挑戦と感じる。しかし重要なのはそこに住む人、一人一人のことを考えること。「“平和構築”という言葉はNGOに入って初めて知りましたが、“平和”とは人々の関係から“醸成“されるものと考えていて、“構築”という概念に違和感を覚えました。その疑問を解消するため、この仕事を続けているのかもしれません」。もともとはホスピタリティービジネスに関心があり、社会人類学を学んだ佐伯氏の“ひと”を思う心に、その活動の原点を見た。